

No. 54

2013. 4

世田谷文学館 ニュース

SETAGAYA LITERARY MUSEUM

館長の作家対談
加藤幸子（小説家）



「上を向いて歩こう」展 出品資料 「上を向いて歩こう」オリジナル盤ジャケット（発売／東芝レコード） 個人蔵

館長の作家対談

ゲスト
加藤幸子
(小説家)

聞き手
菅野昭正
(世田谷文学館館長)

『加藤幸子自選作品集』全5巻の刊行が始まった加藤幸子氏をお招きし、菅野館長がお話を伺いました。

館長▼最初に、『加藤幸子自選作品集』の刊行開始、誠にめでとうございます。加藤さんは濫作なさる方ではありませんが、作品の数はかなりあると思います。全作品のどのくらいの割合が収められるのですか。

加藤▼半分より少ないと思います。これだけでも、自分をさらけ出すような気がして恥ずかしいです。館長▼収録に際して、前の作品に手を入れられましたが。

加藤▼手直した部分も多少ありますが、大幅には変えていません。でも、昔の作品を読むと、別の人の作品のような気がします。

館長▼『夢の壁』で1983年に芥川賞を受賞される前にも、作品を書いておられますね。

加藤▼1982年に『野餓鬼のいた村』で新潮新人賞をいただきました。「新潮」編集者の小島千加子さんが私の作品を読まれて、「新潮」に向けて書いてもらなさいって言うて下さり、『野餓鬼のいた村』を載せていただきました。出版社の文芸誌に載った初作品で新人賞と、本当に思いもかけないことでした。

館長▼小島さんとは僕も古い知り合いで、とても

う感じでした。

館長▼その時お読みになったのは、古今東西、何でもですか？

加藤▼濫読ですけど、もともと日本文学よりも外国文学のほうが好きでした。

館長▼叔父様の加藤道夫さんも、若林の家で一緒に暮らしておられたのですか。

加藤▼私たちが引き揚げた前年に道夫叔父がユーギニアのほうから戻っていました。私が2階で、その2階の真下が叔父と治子さんの部屋です。館長▼加藤道夫さんは、劇作家として、僕らが学生の頃のスターでいらしたけど、昭和20年代にジロウドウとかフランスの現代文学を大変熱心に紹介された翻訳の人でもありました。叔父さんの影響でお読みになりましたか。

加藤▼読みました。叔父から自由に部屋に入って読んでいいと言われていましたので、叔父の本棚の本は殆ど全部読ませてもらいました。本を1冊買って貰えるのはクリスマスプレゼントと決まっていた貧しい時代でしたが、仕事柄、叔父のところには本は沢山あって、自由に使わせてくれました。いろいろな意味ですごく大事な人でした。

熱心な編集者ですね。

加藤▼小島さんがいなければ、挫折していたかもしれません。そういうめぐり逢いがいくつも重なって、ここまで支えられてきた気がします。

館長▼その前に加藤さんは同人雑誌経験というのはありますか？

加藤▼学生時代は短い小説を二つ書いただけでした。文芸だけではない学内誌に変名で投稿したら掲載されて、それが最初に活字になったものです。卒業して最初に投稿したのは、「三田文学」です。返事がなくて諦めていましたが、新しく編集長に就かれた桂芳久さんが届いていた原稿を全部丁寧に読み返して、私の作品を発掘して下さい



『加藤幸子自選作品集』(2013、未知谷)、第4巻(第1回配本)

大好きな作家たち

加藤▼学生時代は実存主義が全盛で、サルトルなどを読みました。それからカミュが好きになりました。私、好きになると本当にファンになってしまいます。近くにいたら「追っかけ」になる位(笑)。

館長▼カミュですか。

加藤▼学生時代はカミュです。それからだいぶ経って、大岡昇平さんの『野火』を読んだ時にとても惹かれて、今度は大岡昇平さんの追っかけをしないくらいでした。あの文体が大好きで、何度も読み返しました。

館長▼『野火』は、大岡さんの文体が確立された最初の作品ですね。日本で明治時代に出た聖書の文体を下敷きしているのではないかと思いませんか。1946年の頃の日記に、私は文体を持っていない、どうしようかというようなことを書いていますね。

加藤▼大岡さんが？

館長▼ええ。翻訳体を使うより仕方がないと。確か、丸谷才一もそれに注目したと書いていました。加藤▼最後のほうは本当に聖書の神が出てきます

ました。桂さんが編集長をされた時期に2作ほど載せてもらいましたが、そのあと「三田文学」が休刊になって、私も仕事をしていたので、全然書かない時期がありました。だいぶ経って、遠藤周作さんが編集長になられた時、こんな有名な作家に読んでいただければ、と思って投稿して、また発掘していただきました。具体的に細かく手直しするように言って下さいました。

少女時代を過ごした若林の家

館長▼学生時代の話が出ましたが、北海道大学をご卒業ですね。由緒ある北大農学部。



『家のロマンス』(2006、新潮社)

ね。ドロドロした戦地の戦闘のこととか飢餓状態のことを書いていながら、文体のおかげで顔を背けずに読むことができる作品で、私のお手本でした。

館長▼凄惨なことが書いてあっても、文体の力で陰惨さが中和されるというか、陰惨な感じがしない。あれは素晴らしい、文体の効果だと思っています。

加藤▼そうですね。あとはやはり、尾崎翠が好きです。

館長▼昔、たまたま尾崎翠さんの佐藤春夫論を読んでいたから、「六角形の心臓」とか何か、不思議な言い方が出てきて、面白い作家がいると思いました。それで、『第七官界彷徨』を読みましたが、その頃は誰も尾崎翠のことを言っていなかった。そうしたら、あるとき突然、加藤さんが尾崎翠について書いておられるのを発見しました。

加藤▼偶然、大森の古本屋で『第七官界彷徨』に出会いました。題が面白いと思って買って、読んで、すごい人がいると思いました。それで、尾崎翠を好きになって、こんなにすごい人を誰も何もコメントしないなんておかしいと思って、とうとう評論を書きました。

館長▼尾崎翠に関しては、まだ書き足りませんか？

加藤▼クラーク博士に憧れたわけではなくて、子どもの頃から自然とか生き物が好きだったので、そういう方面のことをやりたいと思って。

館長▼子供の時自然が好きだったというのは、きっかけはどういうことでしたか？

加藤▼中国にいた小さい頃から動物は好きでしたが、植物とか虫とかも含めて好きになったのは、世田谷の若林に引き揚げてからです。そこは祖父母の家で、525坪もある大きな敷地でした。

館長▼『家のロマンス』に書いておられますが、1928年から32年頃、北原白秋が住んでいた家だそうですね。

加藤▼そうです。家自体も白秋好みの、和洋折衷の感じでした。洋館みたいな部分は蔦が這っていて、夏は蔦に覆われました。植物園のように樹木が沢山あって、庭も広いので、子どもの環境にはとても良いところでした。

館長▼学生時代に小説を書かれたきっかけは？

加藤▼仕事も含めて生物関係に進むつもりで、小説家になろうとは思っていませんでした。ただ、自分でもよく分らない衝動があつて書きたくなる。本を読むのはすごく好きで、特に文学作品はずっと読んでいました。きつこうした本や、何か読んだものが引き金になって、書きたくなるのではないかという気がしました。書いた後、どうしようかと思つて、「三田文学」に送ってみるとい

加藤▼少しはありますけど、そのあといろいろな研究者がいろいろな角度から尾崎翠を分析していますので。カミュと大岡昇平さんと尾崎翠さんと、これが私の憧れの3人です。

館長▼尾崎翠については既にお書きになられたましたが、大岡さんの『野火』論、女性の批評家はもとより、女性作家が大岡さんのことを書いたものなんて殆ど目にしたことないから、是非。

加藤▼書けないですよ。ああいう文章を書かれてしまうと。

館長▼でも期待しています。カミュ論も。

加藤▼好きだけではないっていう感じになっちゃったらすみません(笑)。

作品のテーマ、これからの執筆

館長▼加藤さんの小説は、年代によつてテーマが少しずつ変わつておられると思います。『夢の壁』などの「北京もの」は、もう殆ど書き尽したとお感じですか。

加藤▼そうですね。最後に、時間がだいぶ経つてから、中国で子ども時代に遊んでいた旧友に再会した話を書きました。この2002年の『長江』

加藤幸子(かとう・ゆきこ)

1936年、北海道生まれ。父親の赴任に伴い、5歳から11歳まで北京で過ごす。47年帰国、世田谷区若林の祖父母の家に住み、区立弦巻小学校を卒業後、経堂の恵泉女学園に通う。この若林の家では、劇作家・加藤道夫、女優・加藤治子の叔父夫妻とともに暮らした。北海道大学農学部在学中に学内誌に小説を寄稿、卒業後、農林省農業技術研究所、日本自然保護協会に勤める傍ら、「三田文学」等に作品を発表。82年、「野餓鬼のいた村」で第14回新潮新人賞受賞。83年、「夢の壁」で第88回芥川賞受賞。90年刊行の『尾崎翠の感覚世界』は尾崎翠再評価を牽引し、91年に同書で芸術選奨文部大臣賞を受賞。2002年、北京時代の友人との再会を描いた『長江』(2001年刊)で毎日芸術賞を受賞。動植物や自然をテーマとした著作も多い。



『夢の壁』(1983、新潮社)

「上を向いて歩こう」展 — 奇跡の歌から、希望の歌へ — 4月20日(土)～6月30日(日)

1961年7月21日、世界の音楽史に残るひとつの歌が誕生しました。永六輔作詞、中村八大作曲、19歳の坂本九が歌う「上を向いて歩こう」は、その年の大ヒット曲となったのみならず、1963年6月15日には、全米チャート第1位を獲得、世界中でヒットするというわが国のポップス史上最大の快挙を成し遂げます。

その後も「上を向いて歩こう」は、世代を越えて親しまれる稀有な歌として生き続けてきました。とりわけ、2011年3月11日、東日本震災直後、茫然自失したこの国の人びとが真っ先に思い出し、共に歌ったことは記憶に新しいことです。

この歌の何が、そのように広く人々の心をひきつけ、励ましとなるのでしょうか。全米1位から50周年という記念すべき年に開催する本展では、名曲誕生のドキュメントを、高度経済成長や安保闘争といった歴史的背景のもとに再現し、日本人にとっての希望の歌といえる存在にまで成長した、その秘密に迫ります。



キャピトル・レコードから中村八大に贈られたゴールドディスクの盾。1981年にアメリカの女性デュオ、テイスト・オブ・ハニーがカバーし、ビルボード誌3位、ミリオンセラーを記録。

「上を向いて歩こう」展 記念イベント

① トークショー

マッシー村上と「上を向いて歩こう」

出演：村上雅則(野球解説者 日本人初のメジャーリーガー)
佐藤 剛(音楽プロデューサー・『上を向いて歩こう』2011、岩波書店著者)

日時：2013年4月27日(土) 14時～15時
参加費：500円/当日先着150名

② エフエム世田谷開局15周年公開録音イベント

「上を向いて歩こう」が生まれた時(仮題)

出演：永 六輔(作家 「上を向いて歩こう」作詞)
日時：2013年5月5日(日) 14時～15時
参加費：500円/事前申込による抽選150名

③ トーク&映画上映会1 『青春を賭けろ』(1959年公開・東宝・63分)

出演：佐藤利明(評論家)、佐藤 剛
日時：2013年5月18日(土) トーク13時30分～、上映14時30分～
参加費：500円/当日先着120名

④ トーク&映画上映会2

『上を向いて歩こう』(1962年公開・日活・91分)DVDによる上映

出演：浜田光夫(俳優)、佐藤利明
日時：2013年5月26日(日) トーク13時30分～、上映14時30分～
参加費：500円/当日先着120名

⑤ 「SUKIYAKI 50」anniversary

「こども×おとな×ロック×SUKIYAKI」セッション!!!

講師：三宅伸治(ミュージシャン)、佐藤 剛
日時：2013年6月15日(土) 14時～15時30分
参加費：無料/当日先着120名
対象：小・中学生～一般

〔参加・申込方法〕当日先着のイベントは、当日11時より整理券配布。事前申込のイベントは、往復はがき(各イベントにつき1通)に① イベント名・開催日② 氏名(連名可)③ 住所④ 電話番号を明記し、世田谷文学館「上を向いて歩こう展」係まで。各開催日の2週間前必着。応募者多数の場合、抽選。

で、一応終わりにしようかと。

館長▼『長江』は、加藤さんがいらした時期より後の文化大革命や、天安門事件以降まで書かれていますね。

加藤▼旧友が、紅衛兵に私たちの写真を「日本人家族だから」と燃やされてしまったと、悲しそうに言っていました。そんな話をちりばめながら、今の現実の中国も書いて、終りにしよう。

館長▼あの作品では、日本でも同時代におこった学生運動や、いろいろあったことを対照的にいうか、交錯して書いてあるので、時代をとてもよく書いておられると感銘を受けました。

加藤▼それぞれの国で流れがあった訳ですよ、違う形で。

館長▼ええ。それがパラレルになったり、交錯したり、お互いに昔を振り返りながら、こまで辿ってきた人生経験を語り合う。小説として密度が濃いと同時に、一種の時代の証言にもなっている。もつと読まれていいと思いますが、反響はいかがでしたか？

加藤▼私は、その時書きたいものを書いていて、で、反響を期待するわけではないのですが、私の作品はとつきにくいのでしょうか？(笑)

館長▼とつきにくいということはないと思いますが、日本では評伝でも小説でも、質実でリアリティに目配りし、きちんとした形で書かれているものに對する反響が鈍いと感じます。それで損を



している作家は随分いると思います。でも質実な作風というのは、地下水のようにだんだん浸透していつて、長持ちすると思います。それから、力を入れて書いてらっしゃるのは、やっぱり環境問題ですか？

加藤▼いえ、小説の中に環境問題を持ち込もうとは思わないのですが、とにかく生き物や自然が好

館長▼それぞれ犬によってやっぱり性格、犬格というのかわかりませんが、違うでしょうし、ものの方、感じ方も本当に違うでしょうね。

加藤▼違います。

館長▼もちろん15に書き分けて。

加藤▼書き分けなければ。

館長▼僕は子どもの頃にシートンの動物記を読みました。

加藤▼あれも面白いですけど、擬人化されているところがありましたね。

館長▼そうですね。子ども向けにわかりやすくして。

加藤▼私としては、できるだけ小説だから擬人化を排して、リアリズムにしようと思っています。

館長▼犬と一緒にいるのはなかなか難しいですね。

きなので、よく動物を主人公にします。自選作品集第3巻に入る『ジョンとともに』は、鳥が主人公です。先ほど作品にリアリティがあると仰ってくださいましたが、『長江』や『夢の壁』は人間が中心なので人間のリアリティ。鳥の話では、鳥のリアリティで書こうと思いました。

館長▼野鳥ですか。

加藤▼この場合は野鳥です。別に野鳥じゃなくてもいいのですが、やはりリアリティというのは、人間にとつてのリアリティと、例えば鳥にとつてのリアリティは、全く違うリアリティだと思って。

館長▼なるほど。

加藤▼そこで、私としては、人間目線ではなく、鳥の視点で書いたつもりです。そこまでわかるほど生き物が好きな人が文学界には少ないのか、さほど新しさは評価されませんでした。鳥のリアリティで書かれた作品は今までにないだろうと、かなり大胆な試みだと思いながら書いていました。

館長▼これは鳥の目で世界を見るとか、そういうことですか。

加藤▼そうです。色や何かも鳥の見える色に限られますし、声、聴覚ですか、鳥の感覚器を駆使して書こうと思ったんですね。それから鳥の生態を大切に書こうと思つて、『ジョンとともに』の主人公は、世界でまだ発見されていない鳥ということにしました。そういう未発見の鳥も現にいます。そこで、そういう鳥の生態を書いて、それがいかにして生きのびているか、いかにひっそりと人に知られずに生きてい

るか、という話です。

館長▼動物のお話はそれ以外にいくつか手がけてらっしゃいますね。

加藤▼はい。自選作品集第4巻の、『ミリヤムの王国』のミリヤムは、ネズミの名前です。ただ、これはネズミの立場に立つて書いたのではなくて、人間の少女がミリヤムというネズミと交流する話です。

館長▼創作力は少しも衰えておられないと思います。これからの文学的活動の見通しをお伺いしたいですね。

加藤▼笑われてしまうかもしれませんが、鳥のリアリズムは理解されなかったので、今は犬のリアリズムで書いておりました。

館長▼今執筆中ですか。

加藤▼はい。自選作品集の刊行や、別に頼まれた短編などで中断していますが、15匹の犬が登場します。それぞれみんなの経歴を、さつき仰つていただいたように時代と重ねて書いています。犬の生活も、時代とともになんか変化していますので。

館長▼そうですね。食べ物なども、昔はドッグフードなんてありませんものね。

加藤▼お医者さんにもそんな始終行きませんしね。それぞれ15匹の犬がその時代で生きているのを、犬のリアリズムで構成しようと書いています。ちよつと自分でも愚かしい気もしますが、年をとってきたから書きたいものを書いたほうがいいと思つて、いま9匹目を書いていきます(笑)。

館長▼それは連作ですか？ 一編一編主人公が変わるのですか？

加藤▼変わります。昔の犬の寿命は大体7、8歳で、10歳くらいまで生きれば長命な方でした。それが、時代とともに栄養状態もよくなり、薬も出 came したから、だんだん延びて来るんですよ。

館長▼人間と同じですね。その15という数はどう

いかかつて、やつと犬らしくなりました。

館長▼それは飼い主によく似てきたんでしょう(笑)。その犬も登場するわけですね？

加藤▼最後の締めくくりで。

館長▼いつごろ完成される予定ですか？

加藤▼今年いつばいを目ざしています。

館長▼そうすると自選作品集の最後の配本と同じ時期ですね。自選作品集の順調な刊行と、お犬様の連作の完結をぜひお祈りして期待しております。本日は、ありがとうございます。

加藤▼重圧になりましたけど、お犬様を書かなくては(笑)。ありがとうございます。

(2013年2月13日 世田谷文学館館長室にて)

当館収蔵品の紹介 47

會津八一「学規」と小林正樹



「学規」は、歌人・美術史家・書家の會津八一（1881～1956）が門下生への指針として書いた四力条からなる書です。1914（大正3）年、郷里新潟から上京した3人の受験生を預け、彼らに向けて書いたのが初めとされ、以後八一は弟子と認めた者にこの書を与えました。当館に所蔵されている「学規」は、『人間の條件』『切腹』『怪談』『東京裁判』などで知られる映画監督・小林正樹（1916～

1996）が旧蔵していたものです。小林は第一早稲田高等学校で八一の講義を受けて心酔し、後に早稲田大学文学部哲学科に進んで東洋美術史を学びました。「秋艸堂」と称した下落合の自宅に足繁く通い、拓本の展示会を任されたり、銀座での買い物のお供をするなど文字通りの愛弟子でした。小林が講義をメモしたノートの一部は八一の全集にも収録されています。

「学規」に恥じない映画を
しかし、小林が自分の進むべき道と心に決めていたのは、

父の従兄妹にあたる女優・田中絹代も活躍する映画の世界でした。恐る恐る八一に打ち明けると、いい作品をつくれよ、と快く許してくれたといいます。1941（昭和16）年、入隊を翌年に控え、卒業論文「宝生寺建立年代の研究」を書き上げた小林は秋艸堂を訪ねます。粗食家で知られ、来客にもそれを強いたという八一でしたが、この日食卓には鯛と赤飯の祝膳が用意されていました。

食事を終った先生は筆をとって学規を書いて下さった。学規とは先生が師弟と認めた人にだけ書きおくる人間の書である。学規は次の四力条である。

- 一、ふかくこの生を愛すべし
- 一、かへりみて己を知るべし
- 一、学芸を以て性を養ふべし
- 一、日日新面目あるべし

人間として生きることの尊さ、学問の深さ、芸術のきびしさをこれほどの確に表現した言葉はない。

私はこの学規を座右銘として深く心に刻み、もう十数年映画の道を歩んできた。学規に恥じない映画を創ることを望みながら。

（キネマ旬報「1962（昭和37）年5月上旬号」）



小林正樹の會津八一講義ノート

大学卒業後、小林は松竹大船撮影所に入社し、助監督としていくつかの作品に携わりますが、その一方で高等学院時代の親友3人の共同でシナリオ「われ征か」を執筆しています。徴兵が間近に迫った若き美術史家が、師の教えを胸に、残された時間を奈良の古寺研究に没頭するという物語は、明らかに小林と八一をモデルにしたものです。また、42年に入隊して満

ち、自殺を思いとどまったことがあった、と書いています（『やわらかな心』）。小林は戦時下に「学規」を胸に刻んだ思いについて詳しく語ってはいません。戦後、撮影所に復帰した彼は、木下恵介の助監督を経て1952年に『息子の青春』で監督デビューしますが、当時の新人監督同士による座談会での次のような発言は、「学規」にも通じるその後の小林作品を貫くテーマを感じさせます。

亀井（文夫・編集部註）さんの『戦争と平和』には全然腹が立つてしょうがないのです。ロッセリーニなんか大嫌いですね。何か戦争を肯定せざるを得なくなつて戦争に行つたという立場は誰も書いていない。その苦しさは戦争の結果において否定するよりもつと大切なものをもっているのじやないか（中略）そういう時代とともに変つて行くものに對していくらぶつかつてもダメだということを戦争に行つて痛感したので。す。ぶつかつて変らないう物があるのだと思うのです。それは戦前戦後を通じて貫くものじゃないのです。それは「愛」じやないかと思うのです。

（キネマ旬報「1953（昭和28）年3月下旬号」）

個人の意志ではどうすることもできない巨大な力に巻き込まれながらも、自らの信じるものを貫いて敗れ去つてゆく人間を小林作品は数多く描きました。植民地支配の側に立ちながら自分の良心を貫こうとする『人間の條件』、封建制度の中で家族の愛情を守るために死を選ばねばならない『切腹』『上意討ち 拝領妻始末』など、理不尽な状況下で人間的に生きる道を選ぶ主人公たちを描きながら、小林の頭の中に去来していたのは「ふかくこの生を愛すべし」の一句であつたかもしれません。

八一の師であるラフカディオ・ハーン原作の映画『怪談』で多額の負債を抱えた小林は、麻布の邸宅を手放し、世田谷区梅丘に間借りして生涯を過ごしました。ドキュメンタリー『會津八一の世界 奈良の佛たち』の準備中に倒れ、1996（平成8）年、作品の完成を見ることなく亡くなりました。小林の居室にはいつも「学規」が掲げられていたそうです。

資料受贈報告

平成24年10月14日／平成25年2月10日

▼大坪經子様より椎名麟三自筆資料一括 小出一富様より中野重治・佐多稲子・石井桃子ら諸家書簡および中野重治原稿「日本におけるプロレタリア的・革命的文学の流れについて」 茉莉デビイ様より青山光二原稿一括 宮澤壯佳様より寺山修司原稿「フランク・ザッパ詩集」地下演劇「誌のための紹介訳」ほか

▼榎本綾子様 狩野一男様 川見明子様 桑原真夫様 近藤圭一様 鈴木茂夫様 刀根博樹様 中村真生子様 萩原喜久江様 増井梅宗國様 水本協様 宮田富昭様 山本久子様 山本幸久様 結城千賀子様

2013年度の企画展

「上を向いて歩こう」展

4月20日（土）～6月30日（日） ＊5頁でご紹介しています。観覧料：8頁をご覧ください。

没後80年を記念して開催する大規模な展覧会！

「没後80年 宮沢賢治 詩と絵の宇宙
―雨ニモマケズの心―」展
7月13日（土）～9月16日（月・祝） 2階展示室
観覧料：8頁をご覧ください。

「こんなひと、会ってみたいかった。」
「幸田文」展

10月5日（土）～12月8日（日） 2階展示室
観覧料：一般700円、
高校・大学生500円、
小・中学生250円、
65歳以上・障害者手帳をお持ちの方350円

第33回世田谷の書展

2014年1月7日（火）～1月22日（水）
1階文学サロン 観覧無料

星を賣る店 クラフトエヴィング商會のおかしな展覧会



2014年1月25日（土）～3月30日（日）
2階展示室
観覧料：一般700円、
高校・大学生500円、
小・中学生250円、
65歳以上・障害者手帳をお持ちの方350円

▼一茶記念館 印象社 愛媛人物博物館 小樽文学館 かごしま近代文学館 神奈川近代文学館 鎌倉文学館 北九州市立文学館 北九州森鷗外記念会 月刊俳句会 江東区芭蕉記念館 こおりやま文学の森資料館 国際子ども図書館 こどもの城 坂の上の雲ミュージアム 佐佐木信綱記念館 石神井公園ふるさと文化館 秀明大学 常総市教育委員会 昭和館 昭和女子大学光葉博物館 白百合女子大学言語文学研究センター 逗子市芸術文化事業協会 成城大学グローバル研究センター 世田谷区立郷土資料館 仙台文学館 たましん地域文化財団 田原市博物館 中之条町歴史と民族の博物館 ミュゼ 日本博物館協会 日本ユネスコ協会連盟 沼津牧水会 俳人協会 美研インターナショナル 福岡市文学館 文京ふるさと歴史館

前橋文学館 未知谷 武者小路実篤記念館 森鷗外記念館 山梨県立文学館 洋泉社 与謝野晶子倶楽部
▼あけび「阿房宮」宇宙風「海」「海紅」がいこ亭「風花」「風」「寒雷」「橄欖」「くさくさ」「九品仏川柳会」「群衆」「芸文あまがさき」「月刊ドロキ」「ユキコ」「原型富山」「現代文学史研究」「鴻」「心の花」「午前」「埼玉文学」「山河」「山暦」「春耕」「春燈」「抒情文芸」「新現代詩」「川柳研究」「蠟」「短歌人」「丹青」「地中海」「飛火」「富山県歌人」「白」「羽鳥通信」「響」「プチ★モンド」「麗」「文芸軌道」「本のまにまに」「窓」「未定」「ゆく春」「ランブル」「りんごの木」「檸檬」の各誌ほかより資料のご寄贈・協力いただきました。ありがとうございました。（五十音順）

連続講座

「書物の達人―丸谷才一―」

協賛 J A 東京中央



丸谷才一 画像提供：読売新聞東京本社

6月22日（土） 川本三郎（評論家）
「昭和史のなかの丸谷才一」
6月23日（日） 湯川豊（文芸評論家）
『持ち重りする薔薇の花』そして遺作について
6月29日（土） 岡野弘彦（歌人）
「快談・俳諧・花柳」
6月30日（日） 鹿島茂（仏文学者）
「官能的なものへの寛容な知識人」
7月6日（土） 関谷子（エッセイスト）
『「忠臣蔵とは何か」について』

時間：各回14時～15時30分
会場：1階文学サロン、定員：150名
参加費：各回500円
申込方法：往復はがきによる事前申込（各回につき1通）。参加希望回・住所・氏名（2名まで連記可）・電話番号を明記し、世田谷文学館「連続講座 丸谷才一」係まで、5回通し参加の場合は、その旨明記。各開催日の2週間前必着。応募者多数の場合、抽選。

「せたがや子ども文学館」にあつまれ！！

今年度の活動の柱は3つです。どうぞお楽しみに！

（1）移動文学館

区内の学校・図書館などにでかけて、展示や講座を開催するプログラム。年間を通じて、区内各地で活動しています。

（2）ことのははくぶつかん

文学館内で、「ことば」をテーマに、さまざまなプログラムを半年間体験できる連続ワークショップです。

（3）子ども文学さんぽ

ハイキングしながら俳句をつくったり、自然観察で感受性をたかめる、自然と芸術の野外体験プログラムです。

今年度、リニューアルするのは、「子ども文学さんぽ」です。1年間を2期にわけ、さらに学年で内容を変えたプログラムを開始します。名づけて「★（一ツ星）コース」と「★★★（三ツ星）コース」。

例えば、夏は宮沢賢治の展覧会にちなみ、宮沢賢治の食卓を再現するプログラムを予定。野外料理での共同作業を通じて、賢治の世界観を味わいます。各プログラムの日時、内容、参加方法など、詳細は当館ホームページをご覧ください。



*展示替えのため、4月1日～19日まで2階展示室を、4月8日～19日まで1階展示室を休室します。
 *4月20日は開館記念観覧無料日です。6月1日は、烏山下町まつりのため、全館観覧無料となります。
 *「せたがやアートカード」で、企画展、コレクション展観覧料が割引となります。

企画展

「上を向いて歩こう」展



2013年4月20日(土)
～6月30日(日)
2階展示室

観覧料:一般700(560)円
 高校・大学生500(400)円
 小学・中学生250(200)円
 65歳以上・障害者手帳を
 お持ちの方350(280)円
 *()内は20名以上の団体割引

左から、永六輔、中村八大、坂本九



資料提供 林風舎

没後80年
宮沢賢治・詩と絵の宇宙
—雨ニモマケズの心—

2013年7月13日(土)～9月16日(月・祝)
2階展示室

観覧料:一般800(640)円
 高校・大学生600(480)円
 65歳以上・障害者手帳を
 お持ちの方400(320)円
 小学・中学生無料
 *()内は20名以上の団体割引

企画展

「上を向いて歩こう」展 4月20日(土)～6月30日(日)

没後80年
宮沢賢治・詩と絵の宇宙
—雨ニモマケズの心—
7月13日(土)～9月16日(月・祝)

4月

5月

6月

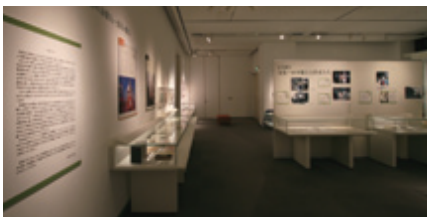
7月

コレクション展

「文学に描かれた世田谷—成城・多摩川界限」 4月20日(土)～9月23日(月・祝)

コレクション展

「文学に描かれた世田谷—成城・多摩川界限」
 2013年4月20日(土)～9月23日(月・祝) 1階展示室



観覧料:一般200(160)円
 高校・大学生150(120)円
 小学・中学生100(80)円
 65歳以上・障害者手帳を
 お持ちの方100(80)円
 *()内は20名以上の団体料金

イベント 〈連続講座〉

「書物の達人—丸谷オ一—」

●6月22日(土)～7月6日(土) *詳細は7頁をご覧ください。

イベント ジュニア向けプログラム〈子ども文学さんぽ〉
 初級編〔★(一ツ星)コース〕小学生向け

●4月20日(土)
 「せたがやフシギ発見シリーズ
 —成城さんぽ—」

●5月18日(土)
 「せたがやフシギ発見シリーズ
 —ファールさんぽ—」

[参加資格] 小学生・原則として連続参加

[定員] 10名

[申込方法] 往復はがきに①講座名「子ども文学さんぽ〔★(一ツ星)コース〕②参加希望者全員の氏名、年齢③住所、電話番号を明記し、「成城さんぽ」は4月6日、「ファールさんぽ」は5月4日(いずれも必着)までに世田谷文学館「ジュニア担当」へ



休館日:
毎週月曜日(ただし月曜日が休日の場合には開館し、翌日休館)

開館時間:
10時～18時
(ただし展覧会入場は
17時30分まで)

交通案内
 京王線「芦花公園」駅
 南口より徒歩5分
 小田急線「千歳船橋」駅
 より京王バス(千歳烏山
 駅行)利用「芦花恒春園」
 下車徒歩5分



公益財団法人せたがや文化財団

世田谷文学館 SETAGAYA LITERARY MUSEUM

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山1-10-10

Tel. 03-5374-9111 Fax. 03-5374-9120

ホームページ <http://www.setabun.or.jp/>

せたがや文化財団の催し物

■世田谷美術館 [Tel. 03-3415-6011]

●「暮らしと美術と高島屋」展
 4月20日(土)～6月23日(日)



竹内栖鳳《アタタ立に》
 1909年、高島屋史料館蔵



柚木沙弥郎
 《旗じるし》2011年

ミュージアム コレクション

●「柚木沙弥郎 いのちの旗じるし」
 5月2日(木)～8月18日(日)

■世田谷美術館分館
 向井潤吉アトリエ館
 [Tel. 03-5450-9581]

●「開館20周年 向井潤吉と四季 春/夏」
 4月2日(火)～7月28日(日)

■世田谷美術館分館
 清川泰次記念ギャラリー
 [Tel. 03-3416-1202]

●「開館10周年 清川泰次の世界」
 初期作品から滞米時代まで」
 4月2日(火)～7月28日(日)

■世田谷美術館分館
 宮本三郎記念美術館
 [Tel. 03-5483-3836]

●「女優・踊り子・バレリーナ
 —宮本三郎が描いた女性たち—」
 4月2日(火)～7月28日(日)

■世田谷文化生活情報センター
 世田谷パブリックシアター
 [Tel. 03-5432-1526]

●『ヴォイツェック』
 (韓国語上演・日本語字幕付)
 5月1日(水)～5日(日)
 シアタートラム
 原作:ゲオルク・ビューヒナー

演出:ドウ・ワン・イン
 出演:サダリ・ムーブメント・ラボラトリー



●『オセロ』

6月9日(日)～23日(日)
 世田谷パブリックシアター
 原作:ウィリアム・シェイクスピア
 構成・演出・出演:白井晃
 振付:井手茂太
 演奏:生駒祐子、波多野敦子、清水恒輔
 出演:仲村トオル、山田優、赤堀雅秋、高田
 聖子、加藤和樹、水橋研二、有川マコト他

■世田谷文化生活情報センター
 生活工房 [Tel. 03-5432-1543]

●世田谷アートフリマ Vol.19
 4月20日(土)・21日(日)



■世田谷文化生活情報センター
 音楽事業部 [Tel. 03-5432-1535]

●室内楽シリーズ
 アラウンド ザ ピアノ
 ～2台のピアノと2人のピアニスト～

5月18日(土) 18時開演
 白石光隆(ピアノ)、田村緑(ピアノ)
 成城ホール

●『3本の手のスケルツォ』
 —絵描きとピアノ弾きが紡ぐ、
 「いろ」と「おと」から
 生まれるお話—
 7月21日(日)
 11時開演/14時開演
 北沢タウンホール

